



Title	『うつほ物語』における「代はり」の結婚：疎外される女の宮
Author(s)	戸田, 瞳
Citation	国語国文研究, 156, 1-13
Issue Date	2021-02-08
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/89215">http://hdl.handle.net/2115/89215</a>
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_156_01-13.pdf



[Instructions for use](#)

# 『うつほ物語』における「代はり」の結婚

——疎外される女一の宮——

戸 田 瞳

## 一．はじめに

(大宮)「いさや、いかがせまし。このさまこそ、『あて宮の御代はりに』と、人々のたまふこそ、苦しけれ。小さくより、『藤中将のために』と、勞り生はしたるものを」。(正頼)「さて、このそでこそ・ちこそをば、いかがすべき」。「それを、兵部卿の親王・右大将殿には」とこそは思へど、『いとみじう思ひ給へる仲忠の中將の母あるを、いかにせむ』と。おとど、「いづれを、いかにすべきことぞや」。「なほ、見るに、そでこそは右大將の見給ばむによく、ちこそは兵部卿の見給ばむにこそはよからめ」。(内侍のかみ卷・三八五頁)

(正頼)「……涼の朝臣には、しか思ひ給へしを、春宮より、宣旨なかりし前より、『奉れ』と仰せられしを、『かかる宣旨なむある』と聞こし召して、(春宮)『なほ參らせよ。その由は奏せ

む』と仰せられしかばなむ、參らせ侍りしを、『その代はりに』と思ひ給ふる者の、小さく侍るほどに、今まで怠り侍りつる」。

(沖つ白波卷・四四五頁)

『うつほ物語』の主軸の一つとされる、いわゆるあて宮求婚譚の末、あて宮は春宮に入内することとなった。しかしながら、その後もなお、正頼と大宮は求婚者たちを手放しはしない。今度は他の娘たちを使つて、彼らを取り込んでいくことを画策するのである。

右のやり取りに見えるように、かつてのあて宮求婚者たちと結婚することとなる娘たちは、まさにあて宮の「代はり」であった。しかも結婚の組み合わせは、求婚者たちによる拒否を受け、いとも簡単に二転三転するのであり、ここには「代はり」の連鎖さえ認められる。

おとど(＝正頼)、『あてこそに物のたまひける人をば、ほかに住ませじ』となむ思ふ。『ちこそは右大将ぬしに、けすこそは兵部卿の宮に、あなたの二人をば、姉にあたるをば平中納言、

今一人は源宰相に』となむ思ふ。(大宮)「源宰相をば、こなたに』とこそ思へ。あてこそその、まだ何心もなかりし時、心ざしありて、言ひ歩き給ひしものを。いかに思ひ給ふらむ。おとど、」「さ」らば、兵部卿の宮にも変へむかし」などのたまふ。

(沖つ白波卷・四四六―四四七頁)

おとど(＝正頼)、「いとほしきことかな。あたら人(＝実忠)を。太政大臣も、さやうにや思すらむ、『実忠顧みよ』と、しばしばのたまへば、かくものするを、いかがはせむ。この代はりには、季英の右大弁をものせむ。かの人、見たる所あれば、納言・宰相にもなりぬべき人なり。右大将の御代はりには、良中将をものせむ。……」(沖つ白波卷・四五八頁)

これらの結婚が、いわば取り換え可能なものであったこと、また「あてこそに物のたまひける人をば、ほかに住ませじ」という正頼の意志が、結婚相手を換えてでも実現させんとする程に強固なものであったことが見て取れる展開である。求婚者たちから「代はり」として望まれていたはずのさま宮でさえ、その相手ではなしに、「なほ、さまこそは、涼の朝臣にもせられよ」(三八四頁)という朱雀帝の意向を受け、結婚に乗り気でなかった涼と夫婦になるに至ったことに鑑みても、これらが朱雀帝・正頼・大宮主導で推し進められていた結婚であり、娘たちが求婚者たちから直接望まれたわけではなかったことは明らかと言えよう。

(正頼)「……さて、この二人の宰相たち(＝仲忠・涼)をば、天下にのたまふとも、強ひ申すべし。内裏より、日を取りて、下し賜はせて、責めさせ給ふことをば、はかなき私事にて破る

べきにてはあらず」とて、一の宮の住み給ひし中のおとどに、造り磨き、御座所をしつらはれたること、綾・緋どもして飾り、候ふべき人、皆、髪長く、かたち・心は定められて、八月十三日に婿取り給ふ。中将たち、心にもあらで婿取られ給ひぬ。

(沖つ白波卷・四四七―四四八頁)

ここでは仲忠と涼の結婚が一括りに語られており、涼のみならず仲忠もまた、自らの意志と無関係に、不本意な結婚をしたことが明かされている。

女一の宮と仲忠の結婚は、もともと神泉苑での彈琴に対する褒美として企図され(二九三頁)、その後、宣旨を受けて現実のものとなったのであるが、この結婚について朱雀帝は後に、女一の宮を仲忠に与えた真意が、俊蔭一族の秘琴を女一の宮の子に伝えさせることであつたと語っている(五二二・八五七頁)。したがって、朱雀帝にとつて仲忠と女一の宮の結婚は宿願だったのであり、当然のことながら、あて宮の「代はり」として仲忠に与えたなどという性質を有したのでは全くない。だが、当の仲忠にとつては、女一の宮は得ることの叶わなかつたあて宮の「代はり」に過ぎず、洪々ながら結婚を承諾せざるを得なかつたという趣である。

一方でこの結婚は、かつてのあて宮求婚者たちを手中に収めたいと考えていた正頼にとつても、決して不都合なものではなかつた。女一の宮は、朱雀帝と仁寿殿の女御の間に生まれた皇女であるため、正頼にとつては孫に当たる。独身時代を母の里邸である正頼邸で過ごし(七〇頁)、正頼の子同然に育てられた女一の宮は、結婚後も仲忠とともに正頼邸で暮らすことになり(四六一頁)、そのため仲忠は、

朱雀帝ではなくあたかも正頼の婿になったかのようですらある。

女一の宮の子に俊蔭一族の秘琴を伝えさせたい朱雀帝と、かつてのあて宮求婚者を手放したくない正頼。この二人の思惑をもって、仲忠と女一の宮の結婚は推し進められていった。当の本人である仲忠の意志は全くの不在である。

もつとも、不本意のうちに始まった仲忠と女一の宮の関係も、時を経るに従い徐々に好転していったというのが、この結婚に纏わる従来の解釈であつたように思う。たとえば大井田晴彦氏は結婚後の仲忠について、「過去の恋はかけがえない思い出として胸中に封じ込め、藤壺との新しい関係を模索しながら、宮との幸福な家庭を築いていこうとするのである」としており、『新編日本古典文学全集』の頭注においても、「物語は女一の宮の容姿が、藤壺に劣るものではないことを強調する。藤壺の代りに女一の宮と結婚したという消極的な理由を打ち消し、仲忠の妻には女一の宮がふさわしいことを印象づけようとする」(②三三四頁)、「仲忠は、藤壺と絶妙の関係を築く一方で、妻女一の宮とも仲睦まじい関係を維持している。ただし、この夫婦は、つねに女一の宮のほうが一枚上手であり、仲忠のように卓越した男性でさえ、いささかふりまわされ気味である」(③一九三頁)などという指摘が随所に見られる。

だが、果たして仲忠と女一の宮の関係は、それほどほのほのしく良好なものとなり得たのであろうか。確かに仲忠と女一の宮は、いぬ宮と宮の君という二人の子に恵まれ、その夫婦関係も、

君(＝あて宮)、「女一の宮は」なかなか、いとよしや。よに心憎く思ひたる人(＝仲忠)につき給ひて、一所、心安く。おの

れこそ、かかる大集りに出だし放たれて、よには憂くまがまがしきことを聞き、見給ふ人(＝春宮)は、殊にはなやかに見え給はず。……」(蔵開・上巻・五二二頁)

(人々)「なほ、女一の宮こそ、いと心憎けれ。そこと、心、人に知らせざりつれども、物言ひ触れぬなかりしものを、傍目もせさせて持給へるよ」。(蔵開・上巻・五二六頁)

……そこばく立てて見る車ども、「宮(＝女一の宮)、何を思ひ給ふらむ。ただ人にはさらにも言はず、宮たちと聞こゆるも、さらに、いとくばかりおはするなければ、『めでたし』と見給ふらむかし」と、人々、安からず言ふ。(楼の上・上巻・八七二頁)

などと、あて宮を含めた第三者たちから羨まれるものであった。しかし対外的な姿とは別に、その内実に迫ったとき、この夫婦には最後まで相容れない部分が残っていたのではないか。そしてその原因は、仲忠のあて宮に対する思いであり、また、俊蔭一族の秘琴の在り方によるものではなかったか。本稿では、あて宮の「代はり」として結婚した女一の宮の立場を中心に、仲忠との夫婦関係の様相を探っていきたい。

## 二．あて宮の影が付き纏う結婚生活

不本意な相手との結婚を渋々承知した仲忠と、他の女性に求婚していた男性と突然結婚させられた女一の宮。当然のことながら、結婚当初、二人の関係は良好とは言いがたかった。

藤中納言、靱負の君を御使にて、「ただ今なむまかです。喜びなども聞こえてしかな。渡り給ひぬべしや」など聞こえ給へり。

宮（「女一の宮」）、「喜びは、ここにもうれしくなむ。ただ今悩ましくて」など聞こえ給へり。中納言、「常に、かくのみのたまはせむざらむな」とて、……（沖つ白波卷・四五二頁）

女一の宮の言葉は、新婚の初々しさというよりは、夫との一切の関わりを拒むかのような頑なさを帯びたものであり、これには仲忠も苦笑するより他ない。そもそも先述の通り、女一の宮は正頼邸で独身時代を過ごしてきたため、仲忠がかつてあて宮に熱心に求婚していたこともよく知っていたようである。そのことは、結婚からやや経った頃、あて宮に会いたがる仲忠に対し、そうなたら何もせずにはいられないだろうと女一の宮が窘めていることから窺える。

（仲忠）「……さなること（「あて宮の姿」）は、必ず見せ奉らせ給へ」。宮、「いで、そこ、ただにはあらじ。こと引き出でて騒がれば、聞きにくからむ」。〔蔵開・上巻・五〇九―五一〇頁〕  
かつての思いを忘れ得ない仲忠と、自分が「代はり」に過ぎないことを痛感している女一の宮。根底の部分で心通わない二人の結婚生活には、常にあて宮の影が付き纏う。

かくて、一の宮もさまごそ君も、御かたちもし給ふわざも、あて宮に殊に劣り給はず、めでたく清らに、誰も誰も御心ざし深くめでたきものから、なほ、かの中納言たち、厳しくもてかしづき、帝の居立ちて劣り、年に二度三度の司召になり上がり給へども、「宮の君（「あて宮」）に疎かに思されぬること。世

にあらむ限りは、異心なく、心ざしをだに見え奉らむ」と思へるものを」と思ひ嘆くこと限りなし。

そが内にも、藤中納言は、参り給はざりし時にも、人よりはいらへのためひ、宮にても、時々聞こえさせなどせしを思ひつつ、心魂もなく嘆くこと限りなくて、一の宮とも、時々、ことのついでに、かの御ことを聞こゆるほどに、宮の君の御もとより、一の宮に、かく聞こえ給へり。……宮（「女一の宮」）見給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、「何ごとならむ。見給へばや」と聞こえ給ふ。「あらずや」とて見せ給はず。手を擦る擦る聞こえ取りて見るに、心魂惑ひて、いとをかしく思ふこと昔に劣らず、思ひ入りて物も言はず。（沖つ白波卷・四五二―四五三頁）  
女一の宮が賞賛される場面ではあるが、ここであて宮が引き合いに出されることこそが、女一の宮があて宮の「代はり」であったことを如実に示すものである。何よりも看過できないのは、妻への愛情が深いと語られた傍から、それを打ち消すようにあて宮への未練が噴出している点である。

加えて、仲忠自身、あて宮思慕の念を女一の宮に隠すつもりがさらさらないので特徴的と言える。先に挙げた大井田晴彦氏の指摘はまさにこの箇所についてのものであり、氏は続いて「藤壺への想いを憚りなく語っているのも、宮への誠意のあらわれに他ならない」とも述べるのであるが、しかしながら、仲忠があて宮について語る言葉は、女一の宮への愛情表現に比べ、あまりに比重が大きい。

中納言、「かの御方（「あて宮」）に物聞こえし限り、魂の静まる時なかりしうちに、いみじき秋の夕暮れこそありしか、ほのか

に見奉りしかば、静心なく思はえしかば、『近くに』とて参り来たらし夕暮れに、月見給ふとて御琴遊ばししに、死に入りて、身のいたづらにならむこと思はず、片時世に経べき心地もせで、せぬわざわざしつべき心地こそせしか。今まで生きて巡らひ、さる過ちせずなりにけるは、かくても候ふべきにこそありけれ。……「仲忠が心地惑はずばかりは遊ばすなりしを、誰に恥ぢ給ふにかありけむ。琴の御琴は、嵯峨の院の御子の日にだに、春日にて遊ばすなりしにはこよなくまさりたりしを、まして、今は、いかならむ。いでや、ありがたくこそおはすれ。……」

（沖つ白波卷・四五二―四五三頁）

取つて付けたように、自分は女一の宮と結婚するべき運命だつたと言ふのも、直前にあて宮の文を見て取り乱したことに對するごまかしである。その前後に長々と語られるのは、あて宮の琴についての話題であり、形ばかり女一の宮の機嫌を取つた上で、仲忠は滔々とあて宮への思いを述べ続けるのである。これは女一の宮への誠意というよりも、むしろ未練が大きすぎて自分一人では抱えきれず、女一の宮を聞き手として思いの丈を吐き出している図と言えよう。あて宮思慕の念を妻公認のものとすることで、仲忠は却つて、後ろめたさを抱くことなく、堂々とあて宮を思い続けられる状況を作り出したのである。仲忠は、仲頼や実忠のように未練を抱き続けて身を滅ぼすわけでもなく、かといつて、一切の未練を断ち切つて、女一の宮との誠実な結婚生活に甘んじようとするわけでもない。そこには、結婚生活とあて宮思慕の両方を維持しようとする、彼の打算と強かさがある。

そしてこの関係は、女一の宮がいぬ宮を出産した後も、さほど変化しなかつたのである。いぬ宮が安産にて誕生し、産後の女一の宮の美しさが語られ、夫婦の幸福な様子が垣間見えたその直後、仲忠と女一の宮のもとにはあて宮からの便りが届くのだが、その際の二人の様子を見ていきたい。

宮、開けさせ給ひて、見給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、「何ごとか侍らむ。見侍らばや。」「人に、な見せそ」とあれば」とて見せ給はねば、「わが君は、思し隔てたるこそ」とて、手をさし入れて取りつ。……君（＝仲忠）、見給ひて、うち笑ひて、「久しく見給へざりつるほどに、かしこくも書き馴らせ給ひにけるかな。この御返りは、仲忠聞こえむ。まだ、御手震ひて、え書かせ給はじ。さらぬ時だに侍るものを」とて、ほほ笑みつつ見るに、あはれに、昔思ひ出でられて悲しければ、ゆゆしくて置きつ。……宮、「見ばや」とのたまへば、（仲忠）「さぞ、見給へまほしう侍る」とて出ださせつれば、（女一の宮）召し寄せて、はた、え見給はず。

（蔵開・上卷・四八二―四八三頁）

女一の宮の美しさや幸福ぶりが、出産という大事に際しても十分に語られることのないまま、あて宮の話題へとすり替えられていくことの意味は大きい。しかも、長女誕生という夫婦の喜びの場であるにもかかわらず、仲忠はあつて宮と、妻よりもかつての思い人との交流を優先する。このやり取りは一見すると、夫婦の戯れ合いの趣を有しているようでもあるが、仲忠の粘り方は真剣そのものである。産後の妻を気遣うふりをして、自ら返事を書くこととする彼は、あて宮との繋がりを死守したいあまり、わざわざ女一の宮の筆跡を

押搦するという形で駄目を押した。その直前にはあて宮の筆跡が賞賛されており、この点でも、女一の宮があて宮との比較において貶められていることは明白である。この場面ではまさに、結ばれなかった男女、すなわち仲忠とあて宮の世界が構築されているのであり、女一の宮はれっきとした妻でありながら、完全に蚊帳の外へと追いやられている。

仲忠は、あて宮への未練を断ち切っているわけでは決してない。そしてあて宮の「代はり」として結婚した女一の宮も、あて宮には敵わないということも、夫である仲忠本人によって知らしめられている。そのため、仲忠が時折思い出したかのように女一の宮への愛情を示したところで、そこには白々しさが漂うばかりなのである。

### 三. 出産に纏わる女一の宮の立場

ただ、女一の宮が仲忠の唯一の妻であり、仲忠の、ひいては俊蔭一族の血を継ぐ子を産んだ女性であることは、否定し得ない事実である。当然のことながら、あて宮が仲忠の子を為すことはなかったのであり、この点ばかりは、女一の宮の立場があて宮によって揺るがされることもない。仲忠の心情面においてはあて宮を超越し得なかった女一の宮も、いぬ宮の母という現実的な立場においては、俊蔭一族の中の確固たる地位を手に入れることもできたはずである。

実際、仲忠は女一の宮がいぬ宮を身籠ったときから、自ら率先して女一の宮の世話を焼いてきた。もともとそれは、仲忠自身が「女御子にてもこそあれ」（四七二頁）と期待し、「生まるる子、かたち

よく、心よくなる」（同）と言われる食べ物を用意していることから窺い知れるように、子が無事に誕生するようにという願いから発した行動であろう。母体そのものというより、生まれてくる子こそを案じているらしいその様子は、夫婦仲の良さを描くものでは必ずしもないが、秘琴の継承者を産むことで女一の宮の存在価値が高められるという可能性を、ある程度秘めたものではある。

しかしながら、女一の宮の扱われ方は、いぬ宮誕生後も変化しなかった。そのことが明確になるのは、いぬ宮誕生直後の弾琴の場面である。仲忠は、産後の女一の宮を氣遣うこともないままに、秘琴の継承者が誕生した喜びから龍角風を演奏する（四七五頁）。その琴は空の気色を変え、続く俊蔭の娘の琴がこれを納めるのであるが、この展開はつまり、いぬ宮誕生に纏わる喜びが一貫して、仲忠と俊蔭の娘を軸に展開されていることを物語っていると見えよう。

結局女一の宮は、俊蔭の娘の琴について、「ただ今は、苦しいもあらず。この御琴を聞きつれば、苦しかりつるも、皆やみぬ」（四七七頁）と発言するのみであった。琴を聞いて有り難がる姿は、聞いている場所こそ違えど、他の上達部や親王たちと同列であり、彼女はいぬ宮を産んだ本人であるにもかかわらず、俊蔭一族の喜びの中心からは外されているのである。俊蔭一族にとって重要なのは、後継者の誕生そのものであり、女一の宮がそれによって、母としての存在感を発揮することは叶わない。他者の介入を拒むという俊蔭一族の姿勢は、厳然と貫かれている。

そして、妻個人と向き合うことよりも子の誕生を上位に置く仲忠の態度は、時として女一の宮との間に不和を引き起こすまでに至っ



た。

……中納言、御衾引き着て聞こゆるやう、「かかるもの(二子)、  
またもがな。いととく。こたみは、仲忠がやうにて(一男子)  
を」と聞こゆれば、(女一の宮)「うたて言ふものかな。いと恐  
ろしきわざにこそありけれ」と思して、いらへもし給はず。

(蔵開・上巻・四七九～四八〇頁)

いぬ宮誕生に舞い上がる仲忠は、産後間もない女一の宮に向かい、  
すぐにも男子を産んでほしいと言つてのける。出産の恐ろしさを知  
らない男の、気楽かつ身勝手な言い分であり、その言葉に嫌悪感を  
示す女一の宮との間には、歴然たる温度差が存在していると言えよ  
う。無論、この言葉は、仲忠が喜びのあまりに口走つてしまつた無  
神経な冗談という趣でもあるが、当の女一の宮が冗談として受け  
取つておらず、実際に気分を害しているという時点で、全く冗談た  
り得ていない。そこに、夫婦としての労りや共感は見られず、夫婦  
関係は好転するどころか、むしろその溝を際立たせる結果となつて  
いる。

さらにこの直後には、前述のようにあて宮からの便りが届き、こ  
こでも女一の宮は、仲忠とあて宮の世界からはじき出される。女一  
の宮は仲忠の妻でありながら、そしていぬ宮の母でありながら、確  
かな立場や存在感を形成することができないまま、肝心な局面にお  
いて疎外され続けるのである。

もっとも、第二子である宮の君の誕生に際しては、仲忠も我を忘  
れるほどに女一の宮の身を案じており(八一〇～八一二頁)、ここは  
仲忠が女一の宮個人に向き合つている貴重な場面と言える。だが、

宮の君誕生後の仲忠と女一の宮の関係については、西山登喜氏が「女  
一宮が息も絶え絶えに出産に臨んでいる時には、「死に侍りなむ」と  
泣き騒いでいた仲忠であるが、いざ母子共々無事に出産を終えると  
手のひらを返したように女一宮の容貌を気にする。産後の身体を気  
遣うわけでもなく、「御髪や落ちむ」と思ふこそ、いとゆゆしけれ」  
と、その美の象徴である髪を気にする。臥している女一宮を起こし  
てまでその髪の状態を確かめようとする仲忠には男の論理が介在  
する」と論じており、首肯すべきかと思う。

結局、宮の君出産後も夫婦関係が変化することはなく、しかも宮  
の君は不孝の子として俊蔭一族から疎外されることになるため、宮  
の君出産を以てしても、女一の宮が俊蔭一族の後継者の母として珍  
重されることにはならなかつたのである。

#### 四、秘琴伝授からはじき出される女一の宮

この構図は物語終盤まで維持され、いぬ宮への秘琴伝授という極  
めて重要な場面においても、やはり女一の宮と俊蔭一族の間には一  
線が引かれることとなった。

(仲忠)「いぬ宮などを、疎かに思したるにこそ侍めれ。まだ這  
ひるざり給ひし時だに、この琴を見給ひては、いと弾かまほし  
うし給ひき。……」  
(様の上・上巻・八四八頁)

仲忠は、女一の宮がいぬ宮への秘琴伝授を真剣に考えていないと  
訴えるが、仲忠自身もその話題をここで初めて持ち出しているのだ  
あるから、女一の宮を一方的に責めるこの言葉は全くの詭弁である。



しかしこの言葉は、最初から女一の宮を秘琴伝授の中心から遠ざける意図をもって発せられたものであろう。なぜなら、この後追い打ちをかけるかの如く、仲忠は女一の宮の琴の腕前を徹底的に批判しているからである。

「……深き心・高き思ひも、もろもろのことを思ひ合はせ、世の中の、すべて、千種にありと見ゆる物の、おほゆる物、また、時に従ひつつ、色衰へ、久しくなり、また、むなしくなりぬる物を心に思ひ続けて、『琴の音に弾き添へむ』と、思ひ同じくて弾き侍ればこそ、琴の音、思ひ思ひに從ひて響き、よろづの折には合ひ侍れ。(女一の宮が)遊ばすやうに、ただ弾きにやは弾くものならむ」と聞こえ給へば、宮(＝女一の宮)、いとあはれに、「疎かならむ心を思ひて弾き鳴らすべきことにはあらざりけり」と、恥づかしく聞き給ふ。(櫻の上・上巻・八四九頁)

彼女の琴は、自然の情趣と無関係に、ただ闇雲に弾いているだけのものだという。「ただ弾きに弾く」女一の宮の様子が具体的に描かれることはないが、それが、仲忠が考えるところの理想的な弹琴と懸け離れていることは明白であろう。さらにこれ以前にも、仲忠による、女一の宮の琴の受け止め方について窺い知ることのできる場面がある。

宮(＝女一の宮)、「さらに。ここにもせむ。つれづれなるに掻き鳴らせば、(仲忠)『つれなしや。まばゆしや』など笑へば、見だにぞ見ぬ。いざ、今宵、忍びて」とて、琴の御琴どもも取り出ださせ給ふ。(国譲・上巻・六六三頁)

皇女の琴がこれほどまでに貶められるのは、秘琴の絶対性維持の

ため、他者の排除が求められたからに他ならない。だからこそ女一の宮は、秘琴伝授の場からも遠ざけられなければならなかった。秘琴伝授の様子を院や宮たちが見たがった場合に備え、母親でさえ我慢しているということにしたいと、仲忠は女一の宮を説得するが(八六六頁)、仲忠の真のねらいが、当の女一の宮を秘琴伝授に関わせないという点自体にあったことは、言うまでもない。この姿勢について女一の宮は「まがまがしかめれ」(八六七頁)と批判するが、このときも彼女は、俊蔭一族側の人間としてではなく、外にはじき出された人間として、俊蔭一族を批判しているのである。

なお、富澤萌未氏は、秘琴伝授に纏わる「年ごろも、宮(＝女一の宮)の弾き給ふを、添ひ居て、弾かまほしうし給ひしものなれば」(八八四頁)といういぬ宮の様子や、「否。遊びをこそ弾かめ」(八八六頁)、「弾きつべし。宮などのやうに、傍らに置きて、常に、今は弾きてむ」(八八七頁)という発言などをもとに、「仲忠によつて伝授に関わらない日常的なものとして疎外された女一の宮は、実は継承者のいぬ宮にとつては大きな影響を与える存在であった。疎外された日常的なものが実際はその伝授の中心に潜んでいたのだといえる<sup>5)</sup>」とするが、これについては肯んじ難い。女一の宮の琴がいぬ宮に影響を与えているとしても、それは中心と言えるほど重要な位置を占めるものではなく、琴を習い始めるきっかけの部分に過ぎない。しかもそれとて、幼い子供が憧れの対象として、最も身近な存在である母親を挙げているという、極めて単純な母娘関係の形である。この点は、いぬ宮が女一の宮の真似をして、自らの足で車を

降りよとする場面などからも見て取れる（八七三頁）。つまり、いぬ宮が女一の宮に憧れているという点においては、琴も、単なる身のこなし方も、全く同列であったと言える。

加えて、父仲忠や祖母俊蔭の娘の琴は、あくまでも秘される性質のものであった。いぬ宮がそれを耳にできる機会は無に等しかったはずであり、俊蔭一族の琴は元来、いぬ宮の憧れの対象となり得ない。したがって、いぬ宮が女一の宮の琴に憧れていると言っても、その実態は、いぬ宮が実際に目にし耳にすることで憧れ得る琴が、女一の宮のそれしかなかったというだけのことであろう。

また、富澤氏は、いぬ宮の琴がいわゆる奇瑞を起こさないという点からも、俊蔭一族の琴の中でいぬ宮の琴が異質であると主張するのだが、だからといって、その異質性がすなわち女一の宮の琴の影響によるものと言えるわけではない。いぬ宮の琴を、俊蔭一族の琴と女一の宮の琴の融合体と捉えるのは早計である。

そもそも、いぬ宮が秘琴披露の際に奏でた琴は龍角風であったが（九三五頁）、この琴は主に練習用に使用されるものであり（二〇頁、四二頁、八八三頁）、いわゆる天変地異を伴った奇瑞とは無縁の琴である。龍角風はいぬ宮誕生の折、辛うじて空の気色を騒がしくしているものの（四七六頁）、たとえば南風が引き起こすような天変地異（四三頁、二九二頁）などとは、全く次元が異なっている。さらに、いぬ宮の弾琴に先立って俊蔭の娘が龍角風を奏でた折でさえ、奇瑞が起こっていない（九二九頁）ことを踏まえると、むしろ他の楽器を圧倒して響き渡るいぬ宮の演奏は、龍角風の演奏としては傑出したものであったと言えるだろう。

晝になりけるに、いとみじく面白く、樂の聲・鼓の声を、しばし調へさせ給ひて、皆、一度に押し入るるやうに消ちて、ただ琴の聲の限り、上に上りて澄み響くこと、大将（≡仲忠）の御手よりはまさりたり。大将のみぞ、人知れず、「あやし」と思ひ給ふ。源中納言（≡涼）の、「あやしく、龍角の聲は、晝なれど、少しこそ変はれ。この、かうさまの音は、大将は、同じやうに、え伝へ給はざりけることかな」とのたまふを、……

（楼の上・下巻・九三五頁）

この末尾について『新編日本古典文学全集』は、「こんなふうな音色は、大将はこれと同じようにはお伝えにならなかったことだなあ」と訳すが、明らかな誤訳である。この訳を見る限りでは、あたかも伝授に食い違いが起こっており、いぬ宮が力不足であるかのような印象を受けるが、「え伝へ給はざりける」とある以上、ここは「ならなかった」ではなく、「なさることができなかった」と訳すべきところである。

さらに、いぬ宮に琴を伝授したのが俊蔭の娘であつて仲忠ではないことに鑑みれば、動詞「伝ふ」についても、伝授する側から見た「伝える」ではなく、伝授を受ける側から見た「受け継ぐ」の意と捉えるのが適当であろう。『うつほ物語』には、

「仲忠は）故治部卿俊蔭が娘の腹に侍り」と申し給へば、上、驚かせ給ひて、「いかにぞ。三代の手は伝へたらむな。……」

（俊蔭卷・五四頁）

仲忠、「俊蔭の娘から）移し取りて伝へ侍りし仲忠だに、絶えてその筋おぼえず侍るを、まして、元の師は、おぼゆること難

くや侍らむ」。

(内侍のかみ卷・四一六頁)

など、「受け継ぐ」の意と思しき「伝ふ」が数多く用いられており、当該箇所「え伝へ給はざりける」も、これと同様のものであると思われる。

つまり仲忠は、いぬ宮ほどには琴を受け継ぐことができなかったのである。いぬ宮の腕前が父に勝っている、ひいては俊蔭一族の秘琴の継承者として申し分のない域に達していることが、ここで認められていると言えよう。いぬ宮の琴は、天変地異を伴った奇瑞を起さなくとも、既に仲忠の琴を超えているのであり、女一の宮の影響を受けて日常的な琴になり下がっているわけでは全くない。

なお、この秘琴披露の場においても、女一の宮の存在感は希薄であった。女一の宮がいぬ宮の成長を喜ぶ様子は、弾琴終了後に、

(兼雅)「喜びにも、涙とどめられず侍りける」と啓し給ふをば、  
女御の君(仁寿殿の女御)・一の宮の御心、いとあはれにうれしくおぼえ給ひて、……  
(楼の上・下卷・九三六頁)

いぬ宮の弾き給ひつる様を、親宮の、かの五十日の餅参りしほどのの、「昨日今日」と思すに、いとあはれなり。藤壺、「これを、『わが御子』と思はましかば」と思す。

(楼の上・下卷・九三九頁)

と、ごく簡単に触れられるのみである。琴を聞いている最中の様子や心中が語られることもない女一の宮は、その場に集まる多くの人々とほぼ同列の存在であり、この図はいぬ宮誕生の折と全く同様である。しかも、直後にあて宮の心情がかぶせられることで、女一の宮の存在感はあっけなく消されてしまうのであった。

## 五. おわりに

あて宮の「代はり」として、仲忠と結婚した女一の宮。世間からは夫婦円満ぶりや子に恵まれた幸せを羨まれるが、実際の結婚生活は、常にあて宮の影が付き纏うものであった。あらゆる面で優れているあて宮と比較され、貶められ、さらには俊蔭一族からもはじき出されて居場所を得ることできない女一の宮が、仲忠との生活の中で真に満たされることは、終ぞなかったと言えよう。

ところで、仲忠と同様にあて宮の「代はり」と結婚した他の人物は、それぞれの妻とどのような関係を築いていたのであろうか。たとえば、涼は妻さま宮に対し、仲忠ほど露骨かつ執拗な比較や批判を展開することはなく、典侍の言葉によれば、夫婦仲はとも良いいという(五八六頁)。だが、あて宮思慕の念を完全に消し去ることはできなかったようであり、

中納言(涼)、「人の心ばかりくちをしきものこそなけれ。涼は、『ここに、かくて(正頼邸に婿として住み、子までなして)侍らむ』と思はざりき。藤壺を宮に奉り給ひし時思ひしやうは、『いかさまにせむ。法師にやなりなまし。死にやしなまし。滋野の師のやうに、愁へをやせまし』となむ思ひ騒ぎし。……」  
(蔵開・下卷・五七五頁)

源中納言殿も、限りなく喜び給ひて、まづ出で給ひなむとすれど、「藤壺待ちつけ奉らむ」と思すほどに、左の大殿・式部卿の宮より始め奉りて、移ろひ給ひぬ。(国譲・上卷・六三三頁)

……(あて宮) 見給へば、源中納言の御手にてあり。

君がためと思ひし宿のかきを見てあけ暮れ嘆く心をも知れ  
とあり。(あて宮) 見つけ給ひて、北の方(＝さま宮) 見給ひて、  
「うたてあり」と思ひて、隠し給ひつ。

(国譲・上巻・六四二頁)  
など、涼の言動には、随所にあて宮を意識し続ける様子が認められる。また、いぬ宮の弾琴を受けて交わされた、仲忠と涼の最後の会話も、

源中納言は、大将に、「何(なに)ことをか思ひ給ふ」と聞こえ給へば、藤壺の御局を見やりて、「いかで、なほ、物をば思はぬぞ。心軽の御心や」とのたまへば、「いさや、などかは。いかが聞きなむ」とて笑ひ給ひぬ。  
(楼の上・下巻・九三七頁)

と、互いのあて宮への思いに言及したものであり、兩人の意識があて宮を離れることはなかったと見える。

さらに藤英とけす宮の夫婦を見てみると、この二人の関係は不仲とさえ言えるものであった。

ここに、弁のぬし入り給ひて、北の方と物聞こえ給へり。「今日、宮に参りたりつれば、兵衛の君して(あて宮からの)御消息賜はせたりつるがなむ。命あれば、かかる折にも会ふものになむ」とて、大学に参り給ふ。  
(沖つ白波卷・四六二頁)

ここでは夫婦の会話が展開されているが、その内容はあて宮からの文を喜ぶものである。妻に対し、かつての求婚相手との繋がりや嬉々として語る藤英の姿は、あて宮への思いを女一の宮の前で憚りなく語った仲忠に通じるものがある。この言葉に対するけす宮の

反応は語られないが、次に挙げるやり取りを見る限り、その後も夫婦関係は好転しなかったようである。

(藤英) 「……今、かう朝廷に仕うまつり、かかる御仲(＝夫婦関係)に候へど、もの思はしうわびしうなむ。それは、かう見奉る限り、親にも対面し給はず、世には心も行かぬやうにて経給へば、生きて侍る効なむなき。『つたなき人につき給へり』とて、親を勘事し奉るなむ、僻みたるやうなる。……かかれば、かくはなやかに見給ふらむ人々はかなうなりて、季英人々しくならむとも知らず。『勸学院の藤英』と言はれ侍りしかども、上達部の端にまかりならずや。博士とて侍る人、侍らぬをぞ思ひ侍る」と聞こゆれど、(けす宮) いらへもし給はず。  
(国譲・下巻・七八〇～七八一頁)

藤英が言うには、けす宮は自身の結婚に納得しておらず、この結婚を決めた父正頼に対して不満を抱いているという。藤英は世の無常を語ることで、自分との結婚を妻に納得させようとするが、これに対し、けす宮は返事すらしないのである。藤英とけす宮の関係性が如実に表れた場面であり、しかもこの後、二人の様子が窺える箇所は存在しないことから、この夫婦が和合することはなかったと言わざるを得ない。

また、立坊争いが佳境に入った頃、仲頼のもとを訪れた仲忠・涼・藤英・行正(正頼と大殿の上との間に生まれた娘と結婚)らは、あて宮への消しきれない思いを歌に詠んでおり(七七四頁)、あて宮の入内から時間を経てもなお、かつての求婚者たちがあて宮への思いを捨てきれずにいることが窺い知れる。彼らは、何食わぬ顔をして

妻との結婚生活を送りつつも、互いが顔を合わせれば、それぞれの断ち切れぬ思いを語り合うのであった。

ここで思い起こされるのが、本稿の冒頭に挙げた、「このさまこそ、『あて宮の御代はりに』と、人々のたまふこそ、苦しけれ」(内侍のかみ巻・三八五頁)という大宮の言葉である。あて宮求婚者たちは、最初から「代はり」という存在に否定的だったわけではない。この「あて宮の御代はりに」という発言が、どの求婚者によるものであるかは詳らかにならないものの、自ら進んで「代はり」を求めた者がいたことは事実である。

にもかかわらず、求婚者たちは「代はり」との結婚に満足しなかった。結婚生活が完全に破綻することはなかったにしろ、その生活に安住し、妻のみをひたむきに愛した者はいなかったのである。彼らの不満は結局のところ、妻があて宮の「代はり」であったことではなく、他者から強制的に押し付けられた「代はり」であったことに起因しているのである。「代はり」とは無論、それ自身が妥協を前提とした代物ではあるが、それでも仮に、自ら望んだ「代はり」と結婚した者がいたとすれば、次第にあて宮への未練も薄れ、目の前の妻のみを慈しむようになり、その家庭は真に満ち足りたものとなり得ていたのかもしれない。

だが、そうした家庭が実際に描かれることはなかった。『うつほ物語』の「代はり」は飽くまでも押し付けられた「代はり」であり、積極的に求められた「代はり」ではない。そして、その押し付けられた「代はり」と共に築く家庭には、あて宮の影がしぶとく居座り、夫婦の間には隙間風が吹き続けるのであった。

## 注

(1) 本文引用は『うつほ物語全改訂版』(室城秀之氏・おうふう・二〇〇一年一〇月)によった。本文に付した傍線および発言者等の注は引用者による。なお、作中では御世代わりがあるため、院、帝、春宮については呼称が変化するが、本稿では便宜上、嵯峨の院、朱雀帝、春宮とする。また、あて宮は入内後に藤壺の女御となるが、呼称はあて宮で統一した。

(2) 大井田晴彦氏「仲忠と藤壺の明暗―「蔵開」の主題と方法―」(『うつほ物語の世界』風間書房・二〇〇二年一二月)。なお、西山登喜氏「『うつほ物語』宮の君の登場理由―女一宮の〈母性〉を問う―」(『物語研究』七巻・二〇〇七年三月)には、宮の君誕生に纏わる仲忠・女一の宮の不和について指摘があり、本稿もそれに異を唱えるものではないが、これを女一の宮の〈母性〉に帰着させる西山氏と、「代はり」の結婚という観点を重視する本稿とは、立場がやや異なる。

(3) 『新編日本古典文学全集 うつほ物語①』③(中野幸一氏・小学館・一九九九年六月〜二〇〇二年八月)。

(4) 前掲(2) 西山論文。

(5) 富澤萌末氏「うつほ物語『楼の上』巻におけるいぬ宮の〈琴―女一の宮との関係から―」(『物語研究』二二巻・二〇一二年三月)。

(6) 江戸英雄氏はこの「親宮」という表現について、「物語中唯一

め、夫婦仲やあて宮への未練については判然としない。

(とだ) ひとみ・二〇二二年度博士後期課程修了)

の用例で、いぬ宮の母親であることを強調する語彙である」とする(『うつほ物語の表現形成と享受』勉誠出版・二〇〇八年九月、初出「国文論叢」三九号・二〇〇七年二月)。ただ、その一方で『うつほ物語全改訂版』は頭注で、「底本「おや宮」。女一の宮をいうか。ただし、この呼称は、このみ。あるいは、「大宮」の誤りか。大宮は、いぬ宮の五十日の祝いの日に、いぬ宮を見ていた」としている。これが大宮を指す語であった場合には、秘琴伝授の完了やいぬ宮の成長に対する女一の宮の思いは、「いとあはれにうれしくおほえ給ひて」のみであることになる。

(7) この秘琴披露に先立ち、伝授完了目前の七月七日、京極邸では七夕の供物として、三代の秘琴演奏が行われたが(九〇五頁)、これも女一の宮は耳にすることができなかった。涼は一族の間ではないにもかかわらず演奏を聞くことができ、後日、嵯峨の院にその有り様を報告するのであるが、いぬ宮の母でありながら聞き手になることすら叶わない女一の宮は、ここでもやはり、俊蔭一族の秘琴から疎外されていることが窺われる。

(8) ここは一般的に「絵解」や「絵詞」などと呼ばれる部分であるが、藤英夫婦の関係を窺い知ることのできる数少ない、かつ重要な箇所である。

(9) ただし、兵部卿の宮(正頼と大宮との間に生まれた娘、ちご宮と結婚)および平中納言(正頼と大殿の上との間に生まれた娘と結婚)に関しては、結婚後の様子が一切語られないた